

## 【今週の注目疾患】

## 《腸管出血性大腸菌感染症》

2021年第41週に県内医療機関から腸管出血性大腸菌感染症が7例報告され、2021年の累計は110例となった。報告された7例のうち、性別では女性4例（57%）、男性3例（43%）であり、年代別では10歳未満が3例（43%）と最も多くみられた。そのうち2例は溶血性尿毒症症候群（以下、HUS）を発症した重症例であった。いずれも5～9歳の男児であり、O抗原・毒素型はO157・VT1VT2とO157・VT型不明であった。

HUSの届出は本年初であり、2017年以降、県内では計21例が報告されている。21例のうち、年代別では0～4歳が6例（29%）で最も多く、次いで5～9歳が5例（24%）、15～19歳が3例（14%）であった。O抗原別では血清型が確認できた12例のうち8例（67%）をO157が占めており、毒素型ではベロ毒素が検出された12例のうちVT2が5例（42%）、VT1VT2が4例（33%）とVT2産生株が大部分を占めていた（表）。

表：2017年～2021年第41週までに報告のあった県内の腸管出血性大腸菌感染症に伴うHUS患者

診断年	性別	年齢	O抗原・毒素型	診断年	性別	年齢	O抗原・毒素型	診断年	性別	年齢	O抗原・毒素型			
1	2017	男	0～4歳	不明	8	2017	女	15～19歳	不明	15	2019	女	0～4歳	不明
2	2017	男	5～9歳	不明	9	2018	女	70代	O157・VT1VT2	16	2019	女	15～19歳	不明
3	2017	女	20代	不明	10	2018	男	0～4歳	O26・VT2	17	2019	女	0～4歳	O157・VT2
4	2017	女	30代	O157・VT2	11	2018	女	5～9歳	O103・VT1	18	2020	女	10～14歳	O157・VT型不明
5	2017	女	20代	不明	12	2018	男	0～4歳	O145・VT2	19	2020	男	5～9歳	不明
6	2017	男	15～19歳	O157・VT2	13	2019	男	40代	不明	20	2021	男	5～9歳	O157・VT型不明
7	2017	女	70代	O157・VT1VT2	14	2019	女	0～4歳	O111・VT1VT2	21	2021	男	5～9歳	O157・VT1VT2

腸管出血性大腸菌感染症は、無症状から、頻回の水様便、激しい腹痛、著しい血便とともにHUSや脳症などの重篤な合併症を起こし、時には死に至るものまで様々である。

HUSは血栓性微小血管炎による急性腎不全で、①破碎状赤血球に伴う貧血、②血小板減少、③腎機能障害を3徴とする。腸管出血性大腸菌感染症に伴うHUSは、下痢などの初発症状発現の数日から2週間以内（多くは5～7日後）に発症することが多い。激しい腹痛や血便を示す典型的な出血性大腸炎の症例の約10%に発症する可能性があるが、稀に血便症状がなくても起こる。注意すべき症状としては、顔色不良、乏尿、浮腫、意識障害などがある<sup>1)</sup>。致命率は1～5%程度とされる<sup>2)</sup>。

乳幼児や高齢者は、重症合併症を起こしやすいとされており<sup>1)</sup>、特に県内においては10歳未満の乳幼児のHUS症例が多くみられていることから、これらの年代の罹患には注意を要する。

感染経路は汚染された食品もしくは手指を介した経口感染である。予防として、生肉または加熱不十分な食肉類は喫食しない、調理器具類の洗浄・消毒の実施、石けんと流水で手をよく洗うことが重要である<sup>1)</sup>。

## ■参考

1) 厚生労働省：一次、二次医療機関のための腸管出血性大腸菌（O157等）感染症治療の手引き（改訂版）

<https://www.mhlw.go.jp/www1/o-157/manual.html>

2) 国立感染症研究所：腸管出血性大腸菌とは

<https://www.niid.go.jp/niid/ja/kansennohanashi/439-ehc-intro.html>